

平成29年2月6日(月)

老球の細道304号

ゲームマネジメント <14> ゲーム終了後の指導

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ゲームに勝敗はつきものである。「終わりは始めなり」。試合終了は勝っても負けても次の試合の始まりである。気持ちを切り替えて次の試合に向けてよいスタートを切らなければならない。勝っていつまでもいい気になっていると次の試合で必ず足元をすくわれる。喜びは一瞬の束の間。負けて落ち込んでいれば次のゲームはさらに悪い結果を導くだろう。最悪の場合はメンバーを失い、次の試合への参加もままならない状態に陥ることもある。

ゲーム終了時の指導は次のゲームに向けて非常に大切なマネジメントである。特にミーティングにおけるコーチのスピーチは、選手の心に火をつけるか、心の傷口に塩を塗りつけるか大きな影響を与える。どのような注意が必要だろう。

■ 静かな場所で話をする

■ コーチのスピーチの心得

(1) 勝っても負けても常にプレイヤーを励まし、褒め言葉で話を始める

(2) 負けた後は前向きになること

負けた時こそコーチの真価が問われる時である。コーチのリーダーシップや指導力がチームに対して大きく影響するのは負けた後である。敗因を他人や選手のせいにしたり、精神力のせいにしてはいけない。すべてコーチの責任として請け負い、敗因の中から次への飛躍へのチャンスを見つけ、選手を奮起させなければならない。

心ある選手は負けると落胆する。勝つために最善の努力をした時は、いつでも、結果はどうあれ賞賛に値する。負けた後の立ち直りをうながさなければならない。コーチが敗戦にくじけることなく選手を勇気づけているチームは、次に戦う時、獰猛な傷ついた虎のように戻ってくる。このようなチームとは再び対戦したくないものである。

(3) 勝ってもおごらず

勝った時こそ厳しく指導し、兜の尾をしめさせる。「ゲームプラン通りできたのか?」「我々の目標はもっと高い所にあるのではないのか?」と問いただしてみる。勝った時は選手の聞く耳は「ダンボの耳」と化す。厳しいことを十分に受け入れることができる。

私は負けた時のミーティングでのスピーチが苦手だった。「放たれた矢と言葉は戻ってこない」。カッカしていたり、がっかりしていたりするので余計なことまで言いかねなかった。だから負けた当日のスピーチはあまり語らず翌日に持ち越していた。

負けた時こそコーチの真価が問われる。選手を元気づける魔法はない。コーチ自身が敗戦から立ち上がる見本を示すこと、選手を励ますこと、選手を信じること。

コーチの神様ジョン・ウッデンは著書『PRACTICAL MODERN BASKETBALL』でゲーム後の指導について述べている。コーチはこうりたいものである。「私は常に同じ態度や振る舞いをするよう求めている。選手の言動を見た者が、その日のゲームに勝ったか負けたかを言い当てられるようであってはならない。最善を尽くしたのならば、負けたからといって頭を抱える必要はない。また、勝ったからといって、大喜びする必要もない。私は常にプレイヤーが胸を張って欲しいのである」